

# 卷頭言

## 日赤医学雑誌の編集者はランセットの夢を見るか？

徳島赤十字病院 院長 後藤 哲也

総合医学雑誌のインパクトファクターをみると、The Lancet が第一位、そして The New England Journal of Medicine がこれに次ぐという格付けがなされている（Journal Citation Reports 2022 年 6 月 28 日発表分）。それぞれの雑誌の 2023 年第 1 号のトップを飾るオリジナル論文はどうかというと、いずれも製薬会社の資金提供を受けた生物学的製剤の第 3 相臨床試験の報告である。すなわち、これらの論文別刷りの最上部には有名医学誌のロゴタイプが大きく印刷され、製薬会社による製品プロモーションの格好のツールとなる。しかし、このような論文では COI が色濃く反映されているため、結果の解釈には注意する必要がある<sup>1)</sup>。

少し意地の悪い見方をすれば、EBM 商法ともいえるのではないだろうか。例えば、糖尿病治療薬に関する論文の 91% が製薬企業のファンド付きで、その 44% はメディカルライターとよばれるその筋のプロにより執筆されているという報告もある<sup>2)</sup>。また、出版バイアスといえはネガティブな研究結果が投稿されにくいということが有名であるが、出版社が別刷り費用を稼げるスポンサー付きの論文が採択されやすいという出版バイアスもあるようだ。特にランセットはその傾向があり、主要医学誌の中で別刷り費用収入はトップであると指摘されている<sup>3)</sup>。

勿論、私のこのような批判はごまめの歯ぎしりに過ぎない。これらの一流誌は重要な疾患の最新情報や公衆衛生の動向を、優れた論文を通じて全世界の臨床医に届けてくれていることもまた事実である。ただ、私が本誌の投稿者をお願いしたいのは、内容は少々アレでも事実に基づいた虚飾のない論文を執筆していただきたいということである。小なりといえども、こと誠実さという点ではランセットに負けない医学誌でありたいというのが当院の思いである。

本誌の編集者は、決してランセットを夢見ている訳ではないが、投稿者にはこの雑誌を最初の踏み台として、将来ランセットや NEJM へと飛躍していただきたいと考えている。2017 年第 22 巻第 1 号の巻頭言にも書いたが、「徳島赤十字病院医学雑誌は、敷居は低くとも志は高く」というのがモットーであることに変わりはない。

- 1) Graham SS, Majdik ZP, Clark D, et al : Relationships among commercial practices and author conflicts of interest in biomedical publishing. PLoS One 2020 ; 15 : e0236166
- 2) Holleman F, Uijldert M, Donswijk LF, et al : Productivity of authors in the field of diabetes: bibliographic analysis of trial publications. BMJ 2015 ; 351 : h2638
- 3) Handel AE, Patel SV, Pakpoor J, et al : High reprint orders in medical journals and pharmaceutical industry funding: case-control study. BMJ 2012 ; 344 : e4212

